

## 圓教寺縁起

圓教寺の開祖性空上人（910-1007）は、法華經を学び始めた10歳のときから宗教的な道を歩み始めた。36歳で僧侶になり、九州へと旅立った。そこでその後の20年間を過ごした。966年、不思議な雲が性空上人を書寫山に引き寄せた。書寫山で天女が桜の周りで踊りながら、如意輪観音の聖なる偈文を詠じていた。偈文に触発されて、性空上人は木に如意輪観音像を彫った。その像は圓教寺の摩尼殿の御本尊となった。

貴族の橘氏の家に生まれ、性空上人は高級貴族の藤原氏と花山法皇（968-1008）から庇護を受けた。花山法皇は10世紀後半に2回書寫山を訪れ、圓教寺というお名前を授けられた。そのことは圓教寺が皇室によって援助している勅願寺であると宣言されたことである。これは特別な特権と経済的利益を保証する名誉であった。圓教寺は精力的な宗教団体に成長し、性空上人の入寂後も繁栄し続けた。

1177年、圓教寺はまだ権力を保っていた後白河法皇をお迎えする特別な特権を持っていた。7日間の参籠中、後白河法皇は、完成後200年に渡って櫃に納められていた如意輪観音像をご覧になりたいとお求めになった。そのときに摩尼殿は仏教の教えの神髄である摩尼の名前が付けられたのである。さらに1333年に天皇がご訪問なされた。それは後醍醐天皇（1288-1339）で、隠岐島での流刑の後、都にお戻りになる途中で大講堂に御滞在になった。

圓教寺は、日本の長い戦国時代（1467-1568）に衰退期を迎えた。1578年、大名豊臣秀吉（1537-1598）が書寫山に侵入し、寺院の境内を山の要塞に改造した。秀吉は2万人の兵士たちを宿営させた。この2年におよぶ占領の間に、僧侶と寺院の建物は暇を持て余す乱暴な兵士たちの手によって壊滅的な被害を受けた。

1603年に徳川幕府が成立した後、圓教寺の運命は上向いた。姫路城の城主本多忠政（1575-1631）は1620年に圓教寺を訪問し、寺院を復元するための募金活動を始めた。その後、この地域の藩主松平家、榊原家など歴代の武家からも圓教寺は庇護を受けた。

江戸時代（1603年-1867年）に巡礼が盛んになると、庶民は書寫山に集まり始めた。圓教寺は、7県にまたがり1,000 kmにも及ぶ巡礼道である「西国三十三所」に属している。33か所すべてを巡礼した人は、観音菩薩の33のお姿のそれぞれの祝福を受けることができると言われている。この信仰の人気は、1000年を超える豊かな歴史と伝統に支えられて、今なお圓教寺への巡礼者を魅了し続けている。